

私の一冊

歯科衛生学科 吉田直樹 先生

立花隆, 利根川進著
『精神と物質:分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』

小鹿図書館 : 464.1/Ta 13 (文芸春秋)

私が、大学の高学年の時分、「卒業したら研究というものをやってみたいものだ。」という気持ちが大きくなっていった。まだ、昭和時代のことであった。

ちょうどその頃、利根川進氏が、日本人として初のノーベル生理学・医学賞を受賞したというニュースがあった。

百年に一度の大研究であること、日本人であるが、現在は米国で研究を行っていること、などが伝わってきた。

それから1年程経った頃、日本生化学会に於いてであったと思う。非常にワクワクした気持ちで、友人と共に利根川氏の招待講演を聴きに行ったことを覚えている。

さて、過去にノーベル生理学・医学賞を受賞した人々の研究の内容は様々である。「インスリンの発見」、「抗生物質ペニシリンの発見と様々な感染症に対する治療効果の発見」などといった、わかりやすいものもある。一方で、ノーベル賞選考委員の一人が「百年に一度」と称した利根川氏の研究は、『抗体の多様性生成の遺伝学的原理の解明』というものであるが、一般の人にとっては、何か凄そうだけれども、何の事やらさっぱりわからないといった感じのものであった。

本書の生まれた背景には、利根川氏がノーベル賞を受賞した後、日本のジャーナリズムが、わっと押しかけたことにある。利根川氏が、初歩的な内容のインタビューが繰り返されることによって、時間(研究にかける時間)をとられてしまうことを避けたいと思ったことと、自分の研究の内容を多くの日本人に、もっと本質的なレベルで理解してもらいたいと考えたことの、二つの理由があったという。

本書は、利根川氏が素人代表としてのジャーナリストの立花隆氏からの徹底的な質問に応じた長時間インタビュー(延べ20時間とのこと)が基になっている。

専門外の人には、やや難しいところもあるが、本質的なところは十分に伝わるようにという、立花氏の趣向が感じられる。

早いもので、出版されてから二十年近くが経過したが、利根川氏が齒に衣着せず、自身の

考え方、研究者の日常生活を表現している様子が生き生きと伝わってくる。

これから研究者を目指す人、すでに研究を始めているがうまく行かなくて悩んでいる人にとって、非常に興味深い内容だと思う。自分の生活や考え方と照らし合わせると、共感できる部分もあるだろうし、違和感を覚える部分もあるだろう。

もちろん、本書は一般の人々を対象に書かれているので、専門分野が全く異なる人であっても、他の領域の研究や研究者というものがわかって面白く読み進められる。

平成5年には、文庫本も出版されている。

生物学、微生物学、生化学などを学んでいる、本学の学生諸君には、一読をお薦め致します。